

# なんでもない日を、ちょっと特別に

## ひな祭りのちょっと怖いお話。

ひな祭りは、女の子の健やかな成長を願う、やさしく華やかな行事として知られています。

しかし、その始まりをたどると、少し背筋が寒くなるような“真実”があります。

ひな祭りの原型は、平安時代に行われていた「流し雛」です。当時の人々は、病気や不幸、災いは人に取り憑くものだと考えていました。そこで、自分の穢れ（けがれ）を紙や藁で作った人形に移し、川へ流すことで災厄を遠ざけようとしたのです。つまり、雛人形はもともと「身代わり」。幸せを飾る存在ではなく、不幸を背負わせる存在でした。

この考え方は、形を変えて現代の雛人形にも受け継がれています。雛人形を粗末に扱ってはいけない、捨てるときは供養を、という風習が今も残っているのは、人形に“役目”があると無意識に感じているからかもしれません。

実際、日本各地の神社では今も「人形供養」が行われています。長年飾られてきた雛人形が一斉に集められ、静かに焼かれていく光景は、感謝と同時に、どこか緊張感を漂わせます。人形に宿るものが、完全には否定されていない証拠です。

また、「雛人形を早く片付けないと婚期が遅れる」という言い伝えも、単なる迷信とは言い切れません。これは、雛人形が“厄を引き受ける存在”であるため、長く出しておく、厄も家に留まると考えられていたからです。

可愛らしい顔で微笑む雛人形。その静かな視線は、もしかすると、家族の知らない不運や願いを、長い間引き受け続けてきた証なのかもしれません。ひな祭りの夜、灯りに照らされた雛人形を見つめるとき、少しだけそんな背景を思い出すと、いつもと違う気配を感じるかもしれません。



知らなかった！



管理課 石井